



JAC GUNMA

公益社団法人

日本山岳会

群馬支部報

第16号

2021年
11月17日

自然保護委員会初の公益事業

ミヤマシロチョウ観察会と 湯ノ丸山登山



自然保護委員長 木暮 幸弘

日本山岳会群馬支部は7月10日(土)、群馬県嬬恋村と長野県にまたがる湯ノ丸高原で高山蝶のミヤマシロチョウを観察し、湯ノ丸山に登る自然観察会を開いた。

参加者は小学生から70代までの17人。支部ホームページや上毛新聞のぱれっと欄で募集告知したほか、エフエムぐんま朝の人気番組「わいわいグループイン」内の「自然と遊ぼう!」というコーナーも活用して集めた。同コーナーは、月曜日午前9時54分から約5分間、月に2~3回私が出演している。

さて、観察会とはというと、下見時に前もってミヤマシロチョウの巣やサナギのある場所は確認してあったとはいえ、生き物相手の観察会、果たして当日成虫が見られるかどうか正直不安だったが、羽化したばかりの成虫がズミの葉先につかまっている姿や空を舞うミヤマシロチョウを確認することができ



自然観察会の参加者とスタッフ

た。食樹であるメギに作られた巣や黄金色に輝くサナギも間近で見ることができ、参加者はそれぞれ満足してくれたのではないと思う。梅雨時にも関わらず、晴れ間ものぞくまざるの天気にも恵まれたことも条件的によかった。

また、観察会では、地元でミヤマシロチョウの保護活動に取り組んでいる「嬬恋村高山蝶を守る会」の宮崎光男会長に講師をお願いしたが、宮崎会長のユーモアあふれる分かりやすい解説も参加者に好評。本州中部亜高山帯の標高1400~2000mの範囲のみに分布し、群馬県では湯ノ丸山周辺でしか見ることができないミヤマシロチョウの不思議な生態や保護活動に対する理解を深めた。

観察会に参加して

星野 弘美

7月10日参加者17人スタッフ6人で開催された。昨年は雨天により中止になったため、今回初の観察会になった。

9時30分地蔵峠出発。蒸し暑さの中、ワラビやウツボグサ、ハクサンフウロの観察をしながらゲレンデを登った。そして分岐からつつじ平レンゲツツジ群落を歩く。すると今回の目的、ミヤマシロチョウがレンゲツツジの枝にとまっているのを発見できた。また、ここは湯の丸牧場でもあり、放牧されている牛を間近にし、初めて見るピンク柄のかわいい牛に癒やされた。牛乳を一気飲みしたくなった。そして白樺、ダケカンバの観察をしながらメギの木に付いているミヤマシロチョウの巣とサナギも発見できた。昼食を済ませ11時40分湯ノ丸山へ向かう。ハクサンシャクナゲやウス

ユキソウ、ゴゼンタチバナなどの花々が現れ、度々立ち止まりカメラに収めた。湯ノ丸山へは12時55分に登頂した。雲行きが怪しくなったが雨に降られることなく15時に下山した。帰宅し冷蔵庫の牛乳を一気飲みしたが、いまいちだったのは言うまでもない。

レンゲツツジの群落は国の特別天然記念物に指定されていること、ミヤマシロチョウは県の指定天然記念物であり絶滅のおそれが高い貴重な高山蝶であることなど学び、初の自然観察はとても有意義なものとなった。これらを守り続けている今回ガイドをしてくださった「高山蝶を守る会」の宮崎会長をはじめ皆さまのご尽力に心から敬意を表します。

追伸 最近、「ぐんま山と森林」イベント一覧で草刈りや雑木伐採などの作業ボランティア募集の記事を目にした。一瞬考えてみたが、未経験の私には危険なのでやめておくことにした。



前群馬支部長 北原秀介さんを偲んで

群馬県山岳連盟 顧問 八木原 園明

令和3（2021）年10月11日午後、『令和3年10月4日』付の「拝啓 私こと、令和2年6月に非常にまれな転移性神経内分泌癌にむしばまれていることが判明し、若干早めの生涯を終えることとなりました」なる書き出しの北原さんの遺言が書かれた訃報ハガキが和美夫人より届く。

病気のこと、残り少ない人生のことを打ち明けてもらってはいても気は沈んだ。私は強い意志を持って自らの死を受け入れ、迎える2人目の人を知ることになる。JAC群馬支部初代支部長を務め、1972年の群馬岳連のダウラギリ4峰にご一緒した田中壯吉ドクターとこのたびの北原秀介2代目支部長である。

田中さんは末期がんの宣告を受けると支部長を辞し、がんと向き合い、化学療法を受け入れ、自ら選んだ登山やご家族との思い出を自らDVDにまとめられ、自分の葬儀、告別式に流すという私には予測できなかった自伝を仕上げて参列者に別れを告げるという芸当を成し遂げる。医師という職業人ゆえの矜持か、と受け取ったが、今度は北原さんに見せつけられた。

登山中の突然の雪崩、落石や転墜落、交通事故での一瞬のうちの絶命ならいざ知らず、「自らの意に沿わない寿命をどう受け止め、どう胸の裡、腹の中で自分自身との闘いに折り合い、決着をつけて行くのか？」。わたし如き凡人、悟りきれない俗人にはどうしても想像できない。

支部例会後や下山祝いの飲み会の席でトンネル工事の話は面白く、珍しい話を聞かせてもらったことはあるが、ヒマラヤの話はあまりしなかったように

思う。亡くなり、根井新支部長からの北原さんの簡単な略歴の中に1992年のナムチャバルワ隊に入っていたことを知る。休暇の関係で隊を離れざるを得ず、6500mまでだったことも初めての情報であった。

地質学（火山岩）を専攻し吉村昭の高熱隧道や映画「黒部の太陽」に感化され山岳トンネルの現場で働きたいと関越トンネルの地質地表踏査のバイトも。鉄建建設に入社し、希望した青函トンネル、上越新幹線中山トンネルなど数多くの山岳トンネル現場で過ごしたという本物の「トンネル屋」。磊落な人だったから酒好き、飲み仲間としての北原さんは豪快できれいで楽しい飲み方をされた。コロナがやっと大人しくなった今、愉快的時間を共有したかった。悔しく、残念です。安らかにお休みください。

北原さんの大きな背中

日本山岳会群馬支部 支部長 根井 康雄

北原秀介前支部長と初めてお会いしたころは、まだ支部の人数も少なく、支部山行も、例会後の懇親会もなく、個人的にあまり深く接することはなかった。そんな中でも、例会後のショートスピーチで専門の地質やトンネルの話がされた時のことはがっちりとしたあの体型とともに鮮明に記憶に残っていて、素人ながら地形や地質に若いころから興味があった私はその話に関心した思い出がある。支部報をめくると、そのショートスピーチは2014年11月19日のことだった。そして支部報のこのページには、翌月に登られた宝剣岳での写真が載っている。支部報第2号をぜひご覧いただきたい。

北原さんとはじめて山へ行ったのは15年10月25日の赤城黒檜山だった。初めての支部山行で田中壯吉支部長（当時）と北原さんら9人が参加、初冬の風が強く吹く黒檜を和気あいあいと登った。下山後、富士見温泉で汗を流した後、有志で前橋駅近くの居酒屋で下山祝いをすることになった。その時、初めて北原さんと乾杯し、しばし山の話に興じた。田中規王さんも同席していたと思う。

そして17年の春、田中壯吉さんがご病気で退任を表明されるということになったが、役員一同のお願いに、北原さんは次期支部長就任を快く受け入れてくれ、懐の深さを強く感じた。そして、田中さんはこの年の9月、帰らぬ人となってしまったが、北原

さんは「田中前支部長の生き方に学ぶ」と題した追悼文を支部報第7号に寄せられている。北原さんの人を見つめる目の正しさ、人を見守るあたたかな心を感じさせてくれる。その北原さんがその4年後、71歳という若さで逝ってしまうとは。

北原さんからは昨年(2020年)春、1年前から経過観察していた肺の異変ががんであること、さらに肝臓にも悪性度の高いがんが見つかったとの連絡で深刻な事態であることが伝えられた。役員会でも協議の結果、黛利信副支部長に代行をお願いし、治療に専念してもらえよう支部体制も整えた。ご本人にとってはつらい抗がん剤治療が続いたことと思うが、電話や直接会ってお話しするときは明るく、穏やかな表情だった。

今年5月には、北原さんのフルートの「師匠」のコンサートに夫婦で招いていただいた。北原夫妻とともに山やフルートの話で盛り上がった際は、まさかこの北原さんががんと闘っているとはとても思えなかった。6月ころまでは体調も良く、7月の上高地集中には山研泊まりのみで参加するという予定であったが、7月に入ったころだったろうか、一人で行くのは体調面で不安なので、参加を見合わされた。その後、時々はお電話で体調をお聞きしていたのだが、田中壯侖元支部長の時と同じようにだんだんと声もか弱くなってきて、私の心の中にも暗雲が立ち込めてきた。

尾瀬合宿の前日にもお電話を入れてみたのだが、留守電になっていて、そのまま翌日、あわただしく尾瀬に向かってしまった。あの時、なぜ、ご自宅に架電して奥様にご様子をうかがわなかったのか。後悔が募る。その尾瀬合宿の翌日、北原さんは永眠された。

北原さんとは何度か山をご一緒させていただいたが、特に思い出深いのが北海道での全国支部懇で登った「大雪山」と、2年前の尾瀬合宿で歩いたアヤマ平。足の遅い私はいつも北原さんの後ろを歩いていたので、あの大きな背中が脛に焼き付いているかのように印象に残っている。アヤマ平の時は遅れていた私を待って、紅葉して高木に巻き付いているのはツタウルシだから気を付けるように教えてくれた。

支部長としていろいろ考えることもあるが、そんな時は北原さんの背中を脛に浮かべてみることにし

ている。北原さんは支部長としての先輩であるとともに、山の大先輩でもある。若いころに出会っていたら、ぜひザイルを組んで難ルートに挑みたかったと思う。岩登りも下手で足の遅い私でも快くザイルを結んでくれたに違いない。



ナムチャバルワ遠征にて (1992年)

▶若き日の登攀



◀前穂高東壁を登って

故北原 秀介氏 会員番号 8267

- 1950年 4月27日、北海道上砂川町に生まれる
- 1969年 日本大学入学(文理学部地学科)
- 1977年 5月25日、日本山岳会入会
- 1977年 マッターホルン登頂(ヘルンリ稜)
- 1990年 アイガー登頂(東山稜)
- 1992年 ナムチャバルワ
- 2013年 日本山岳会群馬支部所属
- 2017年 日本山岳会群馬支部長(～2021年)
- 2021年 10月4日病没、享年71歳
秀岳院釋光耀(しゅうがくいんしゃくこうよう)

只木良也先生の

『ことわざの生態学』から

——その3【文明の後には砂漠が残る】

文明の進展に伴う自然の荒廃は、宮殿や寺院の造営が盛んとなった飛鳥時代から発生し、藤原京を建設するときには、大和周辺には既に良材が無かったとされています。その後の象徴的な東大寺大仏殿の話を、「法隆寺を支えた木」(NHKブックス)から借用します。

東大寺大仏殿は、聖武天皇の発願により752年建立以来2度焼失し復興されています。創建時の建坪は、今の大仏殿より5割も大きく、直径1m、長さ30m前後のヒノキの大柱が84本、使用された木材は14,800m³に達すると想定され、これらの木材は琵琶湖周辺の山々から運ばれました。

1180年、初代大仏殿は源平争乱時に平重衡の手で灰燼に帰しますが、後白河法皇の院宣により1195年に再建。しかし、近畿山陽筋にすでに良材なく、建築材は周防の国(現・山口県)から瀬戸内海を経由して運ばれました。再び灰燼に帰すのは戦国時代の1567年、松永久秀の乱のときでこの時はすぐに復興できませんでした。それから120年余りを経て1692年に大仏開眼供養、さらに1709年に至って現在の原型である大仏殿落慶法要とな

ります。この三代目建造のときには、木材はいよいよ窮していました。そこで大仏殿の規模を三分の二に縮小し、太い柱も様々な材を寄せ合せて鉄の輪で締める方法とします。しかし、2本の梁に關してはそのようにもいかず、九州霧島山でようやく見つけたアカマツが使われます。2本の大材を海まで60km運ぶのに、延べ10万人と牛4千頭、海上を大阪まで、淀川から木津を経由して奈良までの運搬には1年を要したと言われています。

年を経て1980年に昭和の改修。ヒノキ材を提供したのは、台湾の山でした。

わが国で自然破壊への認識を持ったのは江戸時代に入ってからのもので、森林破壊へ警報を鳴らした学者がいます。岡山藩儒学者熊沢蕃山は「天下の山林十に八尽く」。秋田藩の家老渋江政光は「国の宝は山なり。然れども刈り尽くす時は役に立たず。尽きざる前に備えを立つべし。山の衰えは国の衰えなり」。尾張藩では、木曾谷のヒノキを奥地まで大規模に伐採を進めた後に、資源の枯渇に気付き樹木保存の留山を設けています。このように江戸時代から自然破壊を憂い森林資源の保全を訴えた事例があります。

(自然保護委員：北原 秀介)

(編者注) 本稿は北原前支部長の最後の支部報原稿となりました。

リレーエッセイ⑬ 「3年目を迎える決意」

みなかみで生まれ育った私にとって、思い返せば子どもの頃から「谷川岳」は特別な存在であったように思う。初めて登ったのは、たしか小学校低学年のとき。暑い夏の日。その時見たであろう眺望は、残念ながら記憶の片隅に追いやられてしまったけれど、山頂で食べた母のおにぎりが猛烈に美味しかったことだけは、今でも鮮明に覚えている。それ以来、気づけば毎朝、谷川岳を眺めては「雲はかかっているか」「今日はどんな色をしているか」と確認することが日課となっている。

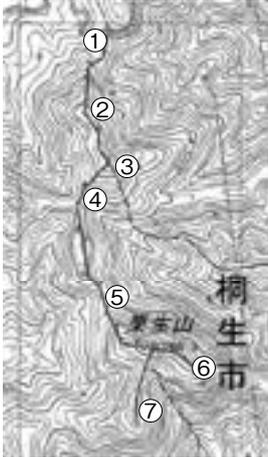
この春転職し、今は毎日、谷川岳の麓へ通勤している。「これで山に行ける！」と思ったのは、浅はかな考えだったわけで……休みの度に山に行けるほど天候には恵まれず、なかなか登りに行けない日々も続き、「仕事と山登りの両立」への悩みは尽きない。でもそれはきっと、山岳会の諸先輩方も通ってきた道なのだろう。群馬支部に入会して、もうすぐ3年目。焦らず、基礎をしっかりと身につけて、永く山登りを楽しめる人間になりたい。

(中島あづさ)

山行報告

栗生山

ヤシオの峰へのバリエーション・ルート



記録係 群馬支部 登山ガイド：加藤 博
 山行日 2021年4月18日
 晴れ
 アクセス 122号から根利八木原大間々線で登山取り付き地点の葛葉峠へ
 コースタイム 葛葉峠(09:20)→栗生山(10:40)→ヤシオの峰(11:00)→葛葉峠(13:30)

股関節故障中で静養していたが、葛葉峠→栗生山の地形図に興味をわき是非とも行きたいという気持ちに抑えがきかなくなった。

ルート上に顕著なポイントが多数あり、初心者が地形図を学習するにはうってつけのルートである(ガイド研修に使える)。

①の葛葉峠には駐車場のような明確な場所はなく、道が少し広がっている所に路駐する。

②のポイントまで一気に100m登り上げると視界が少し開け、西風が急登で火照った体を気持ちよく涼めてくれた。

③のポイントは麓の根利八木原大間々線に下っていく道が付いているが、そちらには行かないように倒木で遮ってあるので④に降りていくには迷わない。

④のポイントは東に顕著な沢(谷)が迫り、地図を見ていれば視界の良くない天候時でも西の尾根に引かれることなく⑤に向かえる。



⑤のポイント(顕著な細い鞍部)あたりから満開のヤシオが「いらっしゃい」と言わんばかりに出迎えてくれた。

ここからはずっとヤシオに囲まれて歩くが、特に⑥と⑦のポイントはこの時期ならではの満開のヤシオと赤城の稜線を望む絶景ポイントだ。地形も期待通りコンパクトな距

離に沢(谷)あり痩せ尾根あり。ルート上に常緑樹が少なく、時期的にも見通しが良いので、等高線一本一本を体で感じられる山行ができた。欲を言えば支尾根谷も巡り谷へ下りたりもして、もう少し地形を確認しながらゆっくり歩けばよかった。次回が楽しみである。(加藤 博)

花の山 小丸山へ

5月の支部山行(15日実施)は袈裟丸山へ。前袈裟丸と途中の小丸山までの2コースだったが、参加者の都合が悪くなって川端、宇佐美、根井の3人のみでの山行に。そこで、のんびり折場登山口から弓の手コースで小丸山までという予定に変更。

われわれ群馬県山岳団体連絡協議会でまとめた上毛新聞社発行のガイドブックにも「花の見ごろには駐車にも困るほど…」と書いているのだが、実際その通りの満車状態。この日は朝6時には駐車スペースがいっぱいだったというJAC清水理事からの事後情報もあったほどで、7時過ぎでの登山口着ではとても駐車は無理。引き返し、手前に停めて折場登山口まで林道歩きを強いられた。天気は曇り、霧そして出発時は小雨も。ただ登り始めると、雨は止み、雨具のお世話になることはなかった。

しばらく登るとミツバツツジが迎えてくれた。霧の中を登る時間も長く、近くの山や尾根さえ望めない天気だったが、伐採後のササの斜面が広がる谷に面した尾根からは、ひと時だが、緑の山肌と、ほとぼしる水の流れ、向かいの尾根やピークを望むことができた。さらにツツジ平を過ぎると、賽の河原へと霧の中を満開のアカヤシオの中の道をたどる。遠景が見えなくても十分に目と心は楽しんだ。

小丸山まで賽の河原を経て片道3時間ほどかけて、のんびり登った。山頂からも霧と雲のベールで展望はきかなかったが、かえってそのベールがスクリーンになって、満開の花を際立たせてくれたように思う。この天気でこれほどまで満足感に浸れた山は初めてのことだった。

帰路は大間々で寄り道。新井規夫会員が始めた蔵人新宇へ。膨大な陶磁器や骨董品の数々に目を見はり、おいしいコーヒーに癒やされ、いい一日を締めくくった。(根井 康雄)



霧の中に浮かぶ花

上高地集中

3組が夏の北アルプスを満喫

群馬支部恒例となった上高地集中。今年の参加者は11人。唐松岳班（7人）、針ノ木岳班（2人）、常念岳班（2人）の3つの班に分かれて実施した。

7月22日にそれぞれの班が現地入りし、夏の北アルプス山行を楽しんだあと翌日23日、上高地山岳研究所に集合した。今年は最高の天気にも恵まれ、各班ともまるで絵葉書のような北アルプスの景色を満喫しながらの山行となった。

昨年までとの違いは、各班とも前日日程に余裕がなく食材の買い出しができなかったため、上高地食堂の仕出しを注文したことだ。おかげで手間はほげ、美味しくいただくことができた。

コロナ禍のため直接顔を合わせる機会が減り開催も危ぶまれていたが、参加者全員が無事に笑顔で集合できたこと、そして山談義を楽しめたことに改めて幸せを感じた。山々を共に歩き、語り合い、豊かな支部山行「上高地集中」を今後も続け群馬支部を盛り上げていきたい。



上高地山岳研究所前で記念撮影

常念岳から河童橋

7月22日9時30分、一ノ沢登山口を出発。心地よい沢の音、美しい緑や花々に心を癒やされる。



常念岳を振り返る

沢を渡るたびに手ぬぐいを濡らしながらゆっくりペースで歩み続け15時、常念小屋に無事到着。

23日4時50分晴れ、日の出に安全登山を祈願して上高地までのロングトレイルの出発。まずは6時常

念岳到着。360度の大自然にテンションが上がる。表銀座、槍ヶ岳、穂高連峰が輝いて見える。先が長いので長居はせず常念岳山頂をあとにする。常念から蝶ヶ岳までの3時間半が思っていた以上に足にきた。蝶ヶ岳付近では、雷鳥のつがいに出会う。10時45分蝶ヶ岳ヒュッテに到着。キンキンに冷えた特製レモンスカッシュで乾杯。昼食をとった後、蝶ヶ岳を11時半に出発。さすがに花の百名山だけあって蝶ヶ岳周辺には、多種多様な高山植物が咲き乱れていた。12時、長堀山で小休止。長い樹林帯の急坂を下



槍ヶ岳を望む

り、14時徳沢登山口に到着。ここからおよそ1時間半、最後に雨に降られたが15時40分無事に山研に到着。25kmに及ぶロングトレイルも吸い込まれるような絶景に囲まれながらの贅沢な山行が続いた。

(田中 規王)

八方尾根から唐松岳往復

今年の上高地集中のプレ登山に、少し遠いが唐松岳を選んでみたところ西田顧問ら7人が参加し、前日の岩岳散策とともに、にぎやかで楽しい山行にな



八方池から

った。去年の爺ヶ岳に続いての北アルプス入門コースだが、頂上の小屋が今期休業となったため、八方池山荘からのちょっと長い日帰り往復となった。

22日は午前中に白馬村着。岩

岳スキー場の駐車場に集合し、ゴンドラで岩岳のトップへ。山上での昼食の後、ネズコの森や展望デッキで楽しみ、山麓の温泉で汗を流してから午後も早い時間に八方池山荘へ向かった。八方池山荘へは黒菱平までタイトな道を車で上がり、そこからは2本のリフトを乗り継げば、目の前が山荘。白馬八方のゴンドラリフトアダムからリフトを乗り継ぐルートもあり、そちらの方がメインルートだが、下山後すぐに車に乗れることを優先した。

八方池山荘は景色もよく気持ちの良いところだが、夕食時に全国山の日協議会のZoom会議があり、食べた気がしなかったのは少々残念だった(会議は有意義なものだった)。夜、窓から星が見え、好天を願いつつ就寝。

翌23日は4時に起床し、5時出発。雲海を見ながら八方池へ。目の前に白馬三山、振り返れば五竜、鹿島槍と絶好の夏山日和となった。1カ所、雪渓を歩くところもあったが、傾斜もゆるく、また回避するルートもあり、問題はない。

登るにつれて不帰の岩壁が迫ってくる。主稜線手



剣立山を望む

前はかつての巻道から尾根上の道に付け替えられていた。両側が切れたところもあり、登り下りが集中し大混雑することもあった。心配された天気は下山までもってくれ、主稜線に立つと剣・立山から薬師へと続くお約束の大パノラマが黒部の谷の向こうに広がっていた。

下山するころには少し雲も湧いてきたが、最後まで雨に降られることもなく、13時半には全員が八方池山荘に到着。しかし、これからが長いドライブだった。途中で温泉に立ち寄ったとはいえ、上高地山研に着いて、先行パーティーの待つテーブルに全員がそろったのは19時を回っていた。

(根井 康雄)

針ノ木岳と蓮華岳

針ノ木岳と蓮華岳、皆さんにはなじみが薄いかもしれない。北アルプスのほぼ中心部に位置している。かつては、剛の者だけが歩く大縦走路の通過点の山というイメージが強かった。しかし最近では、若い人と女性のハイカーが多くなっている。扇沢から入れば1泊2日で針ノ木岳の雪渓と蓮華岳のコマクサを



針ノ木岳

コマクサ



堪能できるためである。

針ノ木雪渓は日本三大雪渓の1つで、当日のGPSデータでは全長1.2km、標高差412mだった。コマクサは、たおやかな頂稜域の白い砂礫の中に広く群生している。高山植物の女王と呼ぶにふさわしい。秋田駒ヶ岳大焼砂の群生と同程度の規模であり国内屈指の群落である。 (黛 利信)



針ノ木雪渓

NEWS

[速報・短信]

古道調査が進行

日本山岳会創立120周年記念事業の全国古道調査が本格的に始動しました。第1次調査対象59古道のうち、群馬支部関係では沼田・会津街道、赤城山と榛名山をめぐる2山域の参詣道、そして清水峠越えや三国街道などを含む上州から越後への道が選ばれ



赤城古道調査。不鮮明な踏み跡をたどる

ました。なお、群馬支部では、以上のほか、野反湖から秋山郷への道、草軽電鉄廃線跡、中山道碓氷峠を推薦しています。

6月27日には、本部プロジェクトチームと群馬支部との合同パイロット調査が赤城山で行われ、三夜沢赤城神社から荒山東斜面をトラバースし軽井沢峠を越え、小沼をかすめて旧大洞赤城神社に至る道を調べました。その成果はリーフレットに掲載されるとともに、今後の全国での調査と成果発表の指針になります。この調査では関東ふれあいの道となっている荒山東山腹の道の下に古道らしい痕跡が見つかり、再調査に期待がかかります。

本部PTと全国各支部では8月からZoom会議で今後の進め方などを打ち合わせています。群馬支部との8月6日のZoom会議では、赤城・榛名を今秋から先行して調査することになりました。また本部PTでは2021年中に古道120すべてを決定する方針です。中山道碓氷峠など支部で推薦した古道がノミネートされることが待たれます。

本部PTでは、最終的に25年にすべての古道の情報を収集整理し、Webサイト上で調査報告を発表し、その後書籍化する予定です。

山岳団体連絡協議会、総会を書面で

群馬県山岳連盟、群馬県勤労者山岳連盟と日本山岳会群馬支部で組織する群馬県山岳団体連絡協議会

(吉田直人会長)の総会は、5月に新型コロナウイルス感染拡大を考慮し、昨年に続き書面で開催されました。

活動・事業面では今年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響下、山フェスタや山の日イベントも中止または延期という状況ですが、ぐんま県境稜線トレイルの安全等調査については例年通り、3団体が分担・協力して実施します。

人事では、群馬県の異動に伴い3人の特別理事が

入れ替わったほか(新任:相川章代観光魅力創出課長・桑原宏政自然環境課長・花崎晋スポーツ振興課長)、群馬支部の支部長交代により、根井康雄支部長が北原秀介前支部長に代わって副会長に就き、引き続き事務局長を兼務することとなりました。

さらに、群馬支部関係では八木原暁明顧問、佐藤光由常務理事、荒木輝夫常任理事、武尾誠同、小池千秋同、中山達也登山専門理事、田中規王同、鈴木良徳会計担当が役員として運営に携わっています。

健康登山塾

今年は10月から

うっとうしく、暑苦しいのだが、マスクをつけることがすっかり習慣になってしまった。ウイルスを退けて「健康」を維持することに、今ほど気を配っている時期はないのではないか。やるせない世相だが、健康登山塾の「健康」、その必要性を思い知らされている今日この頃だ。

今期の塾、4期目は10月にスタート、2月まで計5回の計画で進める。

今期は装いを少し変えた。過去3期は期ごとに塾生を公募していたが、今回は卒塾生78人だけを対象に募集した。卒塾生が自らの進化・深化(退化も)を実感してもらうことを狙った。また、フィールドに加え

て、テーマを決めた机上の講座を加えた。

齋藤繁塾長は最新本の『登山で病気に負けない体をつくる 健康トレーニング』で、①学習としての効果②仲間づくりとしての効果③身体的数値としての効果——の3点を塾の成果として挙げている。「塾生が希望すれば」の前提ではあるが、3つの効果の中の②の効果を期待して「お泊まり講座」を企画している。一晩、ひざを交えて語り合うことで、塾生同士、そして、スタッフとの間



昨年の塾最終回。マスク姿がコロナ禍の開催を物語る

で化学反応が起こることを意図した企みといえる。

振り返ると、会社人生40年の4分の1あまりを「イベント」関連にかかわっていた。参加者1万数千人を超える県民マラソン(当時)は5年間担当した。確か、1万人を超えたのは自分の担当時代だった。ザスパ在籍時代といえ、3千人規模の「イベント」を年に20回実施しているようなもの。1万数千人の観客動員を記録したこともあった。

自慢話ではない。「県民マラソン」にはランニ

ングのブームという時流があった。ザスパではサポーター、ボランティアという志を同じくする強い味方があった。

不特定多数を集めて何かを行うのは博打みたいなどころがあり、終わるまでハラハラ・

ドキドキが続く。そして、終わった後の解放感・達成感は代えがたいものがある。「賭け」が的中したときの気持ちと似ているか。

健康登山塾も広義のイベントといえる。「健康」を希求する時流、多大な労力を提供していただく医療・サポートスタッフの存在。この2つが欠けると、「賭け」には勝てない。

支部会員のみなさん。今期もよろしく願います。
(武尾 誠)

群馬の藪山 ⑫

中山 達也

【小黒檜山】(1644m)

1998年5月(2017年12月) 2.5万図 赤城山

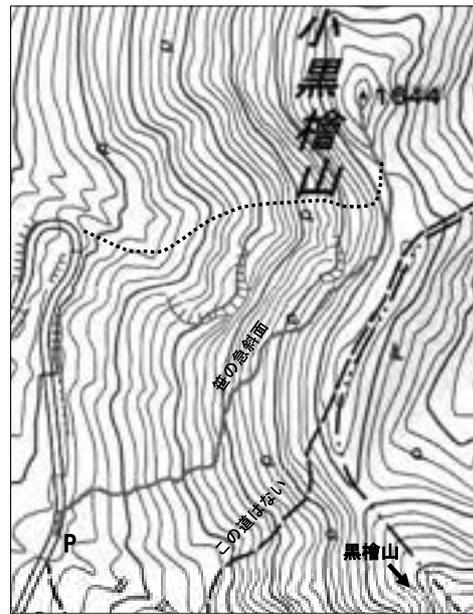
今回は身近な山、赤城山の北にある小黒檜山。

1998年春に登ったが当時の記録では正確にどこに登ったか分からない。だいたい破線辺りを登ったようで、岩場やガレの急斜面で危険を感じ、帰りはほぼGPS軌跡辺りを下ったものと思われる。「車まで車道を下りた」と記述がある。

GPSの軌跡、記録は2017年のもの。北面道路が閉鎖になる前12月初め、ネット情報を元に行った。

「標高1373m」標識付近に車を止め、「カーブ45」標識が入口の目印。すぐ地図に表示されない小さな沢状の流れ跡に出る。ガラガラした石が続き歩きづらいので左(北)の笹の斜面に入る。

登っていくと笹が消える所もあるが、更に急な斜面になる。所々ピンクのリボンが下がっている。位置が高いので雪の時期に付けたようだ。笹は膝から腰ほどだが、急斜面で足元が見難く歩きづらい。しばらく進ると傾斜が緩み、右(東)の尾根に沿ってトラバース



(注) 記述、GPSトレースは登った当時のもので現状は不明。地図、コンパス(GPS)は必携です。地形図の破線の道はありません。

気味にコルに出た。黒檜山からの尾根で、踏み跡は無いようだが、黒檜山から下りてきたほうが楽かもしれない。

笹の斜面を北に登ると大きな反射板がある小黒檜山頂。(登り約1時間30分)

事務局だより

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、イベントの中止・延期が相次いでいます。今後の予定も不透明な状態です。変更・中止等については随時、会員メールでお知らせしていきます。

【主な活動・事業・イベント】.....

〈2021年6月〉

- 支部役員会(6/16 Zoom)
- 支部山行(6/19 北八ヶ岳北横岳 雨天のため9月に延期)

〈7月〉

- 高山蝶観察会(7/10 湯ノ丸山)
- 第47回例会(7/21 Zoom)
- 上高地集中(7/23 山研泊・北アルプス3コース)

〈8月〉

- 山の日イベントin谷川岳 *中止

〈9月〉

- 支部山行(9/12 巻機山井戸尾根)
- 第48回例会(9/15 Zoom)
- 支部山行(9/19 北八ヶ岳)

〈10月〉

- 尾瀬合宿(10/2 ロッジ長蔵泊・尾瀬周辺2コース)
- 健康登山塾第1回講座(10/9 榛名富士)
- 県民登山(10/24 榛名山系)

【今後の主な予定】.....

〈11月〉

- 支部山行(11/6 西上州立岩)
- 山フェスタ2021(11/14 高崎・ピエント高崎)
- 支部例会(11/17 前橋・元気21)
- 健康登山塾第2回講座(11/20)
- 古道調査兼読図実地講座(11/27 榛名古道岡崎ルート)

〈12月〉

- 支部役員会(12/15 場所未定)
- 健康登山塾第3回講座(12/18)

〈2022年1月〉

- 新年例会(1/19 詳細未定)
- 健康登山塾第4回講座(1/22)

【新入会員】.....

清水 信三 木暮 和子 中村由佳理
清水智恵子

日本山岳会群馬支部報 第16号 2021年11月17日

発行：公益社団法人 日本山岳会群馬支部
〒371-0051 前橋市上細井町1200-7(根井方)
<http://jac.or.jp/gunma/>

発行者：根井 康雄 編集者：小池 千秋・萩原 哲
印刷：上武印刷株式会社